第 27 回 宇部・小野田圏域緩和ケア事例検討会報告

緩和ケアセンター事務局

令和４年６月27日（月）に，第27回 宇部・小野田圏域緩和ケア事例検討会が山口大学医学部附属病院オーディトリアムにて開催されました。切れ目のない緩和ケアを実現するために，事例検討を通じて顔の見える緩和ケア連携体制の構築及び連携強化を図ることを目的とし，院内の医師，看護師，心理士，PT など参加され合計 32 名の参加者となりました。

当院の腫瘍センター井岡達也副センター長より開会の挨拶があり，各演者より以下の事例提示があった後，当院の緩和ケアセンター山縣裕史助教を司会として，シンポジウム形式で２名の先生を中心に討論を行いました。

事例：「〝孫と自分の声で喋りたい!!〟と願う
舌がん患者の失声に対するサポートの一例」

山口大学医学部附属病院　B棟6階（耳鼻科咽喉科）　山崎　加代子　先生
緩和ケアセンター　大野　陽子　先生

喉頭摘出術の方針となった患者が音声合成アプリ（コエステーション）®を利用して自分の声を残せるなら手術を頑張りたいと思えるようになった事例を振り返りました。シンポジウムでは、生体機能を失う患者のサポートについて（アプリ紹介のタイミング）について検討しました。参加者の方から以下の通り、たくさんのご意見が寄せられ有意義な検討会となりました。

- 「患者さんにとって声を失うということがどれほど絶望的であるのかを感じ、自分の声を残せるコエステーション®は希望につながることがよく理解できた」
- 「自身の声を残す技術があることを初めて知った」
- 「コエステーション®で他者とのコミュニケーション方法が増えると思った」
- 「多職種が患者さんに関わることの大切さを知った。一番患者さんの近くにいる看護師が様々な情報を知っていることが重要」

この度は，様々な職種の方々に検討会にご参加して頂き，誠にありがとうございました。本検討会は，今後も継続して行う予定ですので皆様のご参加を心よりお待ちしております。

今後ともご理解，ご協力よろしくお願い申し上げます。

≪検討会風景≫

患者の背景

声の分身をつくる

検討事項
①意思決定支援で本人と家族の意向が異なる場合どう関わったらよいか
②声帯機能を失う患者のサポートについて（声スチーション
の案内のタイミング）